

お茶うけ 第43話

「生きる」

- - 映画『もののけ姫』を観て(2)

映画『もののけ姫』は、人が自らの集団を守ろうとする営みが、自然を破壊する行為につながるという不条理の世界を描きます。そして、人と人、人と獣、人と自然の争いに、ハッピーエンドを与えていません。その状況の中で、人々にギリギリの選択をして生きることを求めています。

『もののけ姫』の中に、深い森に住む「コダマ」という可憐な森の精霊が、木々の枝や葉の上に沢山に現れる微笑ましい場面があります。「コダマ」は、淡い緑色をした半透明の、てるてる坊主に手足をつけたような、あどけない姿をしています。「コダマ」は、負傷者を抱えたアシタカを、可愛いしぐさで深い森の奥の静かな沼に導きます。そこは、シシ神が姿を見せる場所で、その負傷者も、後にはアシタカ自身もそこで傷を癒されます。しかし、首を奪われたたシシ神が怒り狂ってさまよいながら、森のすべての生命を吸い取り、森を荒廃させ、山をはげ山に変えてしまった時、あの「コダマ」たちも巻き添えになってしまったようです。



エボシ御前は、シシ神を撃ったとき自らも片腕を失って、自然を破壊することの痛みを感じた筈です。エボシ御前は、自分を頼って生きるタタラ衆のため、鉄を精製するタタラ場を再興すると思われませんが、自然との付き合い方に変化が起きるのでしょうか。

アシタカとサンが、首を求めて荒れ狂うシシ神に、人間が奪ったシシ神の首を取り返してやったことで、森には再生の息吹が芽生えます。

サンは、エボシ御前との戦いの最中に、危ういところをアシタカに助けられます。アシタカは、サンに「生きる、そなたは美しい」と言います。サンは、「アシタカは好きだ。でも人間は許すことはできない」と言いきり、森を守る戦いを止める気配はありません。

アシタカは、この後もこの地に止まって、人と獣と自然のせめぎあいの中に身を置くことになりそうです。少年と少女がお互いに理解を心を通い合わせることに僅かに期待を持ちました。

『もののけ姫』の時代に比べ、現在から将来に向かって、人と自然の問題は解決を見いだせないまま、ますます厳しさを増すことでしょう。しかし、宮崎監督は「憎悪と殺戮のさ中にあっても、生きるにあたいする事はある。素晴らしい出会いや美しいものは存在し得る」と言い、「生きる」と呼びかけます。

アシタカもサンもエボシ御前も、それぞれが守るもののために、真摯に生き続けることとでしょう。人は誰でも、守るものを持っていると同時に、また守られて生きています。守るものがあると、人の心は強くなり、守られていると感じると、人は思いやりの心を持つことができます。

1998年2月の長野の冬季オリンピックの開会式で、最も感動した場面は、競技場に聖火が到着したところですが、競技場の外では、聖火を掲げて孤独に走っていたクリス・ムーン(片手片足を地雷で失った、英国の地雷禁止活動家)が、競技場内に、大勢の「雪ん子」に囲まれて姿を現したのを見た時は、本当に感激しました。世界の子供たちを地雷から守ろうとするクリス・ムーンが、胸に世界の国と地域の旗をデザインした衣装を身につけた大勢の子供たちに守られて走るのは、守るものと守られるものが一体になった姿を表していました。明日を担う子供たちには、戦いで敷設された地雷が残っているなど、様々な地球の問題を抱えながらも、たくましく生きて欲しいと思いました。

『もののけ姫』は、観客動員記録を更新中と聞きます。未来を担う若い人達が、人が生きることの悲しみをわきまえながら、遅く生きることを学んで欲しいものです。

以上

参考資料:

パンフレット『もののけ姫』宮崎 駿監督作品

『宮崎 駿と『もののけ姫』とスタジオジブリ』キネマ旬報 臨時増刊

No.1233 1997年9月2日号